中経論壇

経営支援NPOクラブ理事
山本　章博

科学技術への監視を怠らない

人工知能（AI）と未来社会

人工知能（AI）技術の進歩がめざましい。英国企業が開発した「AlphaGo」は2016年に韓国のイ・セドル9段に、2017年には世界最強と言われた中国の柯潔9段に圧勝した。両棋士共に日本のトップ棋士が容易に勝てない強敵であるから、衝撃は大きかった。それまでもAIは、ゲームやチェスなどで高い能力を発揮していたが、囲碁は考慮すべき手数の多さや局面の複雑さから、一流棋士に勝つには十数年かかるといわれたのに数年で達成してしまった。

芸術面では、レンブラントの全346作品を学んだAIが、まるでレンブラント本人が描いたような肖像画を描き、鑑定士も見抜けなかったという。医療面では、2020年4月号のニュートンが、乳がんの診断精度において6人の専門医の診断を上回るAIの開発に成功したと報告している。私たちの身近な自動運転にも、AIが大きく貢献している。こういう成果の数々を耳にすると、困りごとをAIが一挙に解決してくれるのではないかという期待感と、人間の仕事が不要になってしまうのではないかという悲観的な見方が交錯してくる。

しかし、関連分野の知人たちに話を聞くと、物事はそう単純ではないようだ。確かに特定の課題に絞れば、AIは人間を超えた。一方で、家事ロボットなどの汎用型AIはまだまだとのことである。家事は複雑な仕事を総合したものであり、多様な道具を使いこなす必要があるため、難しいのだそうだ。

面白いことに、汎用型AIの判定基準として提案されているのが、「間取りを知らない他人の家に上がってコーヒーを淹（い）れる」ことだそうだ。知らない相手先の家に乗り込むにはどうするか、コーヒーはどんな形態でどこにあるのか、また見当たらない場合はどうするかなど、AIにとって判断すべき事柄が無数にある。人間が成長するまでに獲得する知識、経験は膨大なものになり、想定外の行動もある。AIがそれを乗り越えるのには、かなりの時間がかかるだろうとのこと。少しホッとするが、しかし、AI技術の進歩は予想もつかない。

ホーキンス博士は、人間が作りだしたAIが、人類を滅亡させるだろうとさえ予言している。遺伝子操作技術については、研究と実行にいくつかの制限が設けられているが、自己学習したロボットが暴走して、人類を駆逐するという危ない未来社会を招かないため、私たちは科学技術への監視を怠らないよう心掛ける必要があろう。